

〔論文〕

日本キリスト教婦人矯風会の朝鮮部会設立と宣教方法論

——1920年代の『婦人新報』から——

神 山 美奈子

名古屋学院大学商学部

要 旨

1921年に矯風会朝鮮部会及び各支部会が設立されたきっかけは、矢島楯子及び久布白落実といった当時の矯風会の代表的人物が満州及び朝鮮巡回訪問したことにあった。しかし、朝鮮にはすでに矯風会会員である淵澤能恵が1905年から活動しており、矯風会の新部会を設立させるには十分整えられた環境であった。本論文では、矯風会朝鮮部会及び支部会が設立される背景及び朝鮮部会を通して矯風会がどのような宣教方法を望んでいたのかについて詳細に考察する。

キーワード：矯風会、女性キリスト者、宣教、朝鮮、婦人新報

KYOFUKAI's establishment of the Chosen committee and method of missions

——with special attention to the 'FUJINSHINPO' of the 1920's——

Minako KAMIYAMA

Faculty of Commerce
Nagoya Gakuin University

1. はじめに

日本キリスト教婦人矯風会（以下、矯風会）は、1886年に「東京婦人矯風会」として設立され、その後「日本キリスト教婦人矯風会」という全国的なキリスト教女性団体となった。現存するキリスト教女性団体としては最古のもので、当初の設立目的はその名の通り「社会の矯風」にあり、特に禁酒、禁煙、廃娯運動などに力を入れた。また、毎年の大会記録、各部会及び支部会活動報告、宗教的講話、時事問題に対する反応、会員たちへのメッセージなどが記された機関紙『婦人新報』（創刊当時の誌名は『東京婦人矯風雑誌』、2017年4月からは『k-peace』という誌名に改名したが、本論文で扱うものは『婦人新報』であるため表記はすべて『婦人新報』とする）が発刊されている。

矯風会はその設立が1886年ということもあり、日本と朝鮮との関係史における激動期を経てきた。それは日本のプロテスタント・キリスト教史全体について言えることだが、日韓キリスト教関係史を扱うこれまでの研究は、主に男性キリスト者の視点を中心に考察されてきたこと、また、現存する最古の女性キリスト教団体であるにもかかわらず、矯風会における日韓関係史を究明する綿密な調査及び分析が行われてこなかった点を問題としてあげることができよう。そこで本論文は、特に1921年の矯風会朝鮮部会設立に焦点を当て、設立背景及び当時の矯風会が朝鮮に対してどのような宣教方法を採用しようとしていたのかについて明らかにする。これによって、これまで明らかにされなかった植民地期における女性キリスト者の朝鮮理解だけではなく、矯風会史の一面を究明するという点で有効な研究となるだろう。これに関しては、矯風会が編集した『日本キリスト教婦人矯風会百年史』においても詳しく取り上げられていない¹⁾。

2. 矯風会朝鮮部会及び支部設立とその背景

矯風会朝鮮部会設立のきっかけとなったのは、1921年4月に初代会頭の矢島楯子と当時矯風会の総幹事をしていた久布白落実が「満鮮四十日の旅」²⁾に出かけたことであった。しかし、すでに朝鮮には矯風会会員である淵澤能恵が1905年に朝鮮に渡り、朝鮮で女子教育活動を始めていた³⁾。つまり、1921年に矢島と久布白が朝鮮を訪問するための準備とその後予定されている矯風会朝鮮部会の設立は、淵澤を中心にすでに整っていた。この時の矢島と久布白の旅は、すでに

-
- 1) 日本キリスト教婦人矯風会編、1986、『日本キリスト教婦人矯風会百年史』、p. 392。に「満州朝鮮旅行」との小見出しで矢島と久布白が旅に出かけたことが記されているが、内容は「満鉄より招聘をうけた講演旅行であった。（略）いたる所で講演、支部新設、揮毫と寸暇ない旅が続いた」程度で、朝鮮部会設立に関する詳細は報告されていない。
 - 2) 久布白落実、1921、「満鮮四十日の旅」、『婦人新報』第285号、pp. 8-13。
 - 3) 淵澤能恵は、1906年に淑明女学校が設立される際、その設立に関与したことが知られているが、これに関しては、拙論：神山美奈子、2017、「淵澤能恵の朝鮮女子教育—淑明女学校設立における日本組合基督教と朝鮮総督府との関係—」、『アジア・キリスト教・多元性』、「アジア・キリスト・多元性」研究会、15、pp. 119-138。を参考されたい。

整えられた場である朝鮮に新部会とそれに連なる新支部会を設立するための旅であったと言える。

久布白によるこの旅の記事が記された同年6月号には、会員の吉武喜久代が「平壤より」と題して次のような報告をしている。

(前文略) 其後諸教會の婦人方の御決心を承り候處三教會にて凡そ二十名位有之申候間今一回集會の上支部組織到たきものと存じ候⁴⁾,

さらに翌7月号には「共同の目的の爲に」と題して、当時の会頭小崎千代が各支部設立に関して次のような内容を記している。

(略) 最近には福井、敦賀、福山、松江、倉吉、八幡、別府に支部が設立され更に満州には大連、撫順、奉天の如き主要地に、朝鮮には京城、平壤、大邱、仁川、釜山等の如き都市に支部が出来、會員は何れも堅實な歩調を以て徐々に根強い仕事に取掛らうとして居られるのであります。私共は新しい會員諸姉のその熱心と誠實に倣ひたいと存じます⁵⁾。

その後、各支部報告の欄には満州や朝鮮の各地から報告がなされるが、その中でも、芝もと子が支部長を務める仁川支部からの報告が目立つ。それは、仁川が港町であり日本人が多く住んでいたことと関連しているのだろう。仁川からの報告が初めてなされたのが上述の小崎の記事と同じ1921年7月号であった。その内容は、「矢島先生一行を向へたのが動機となつて設立され、現在會員十九名あり。(略)」⁶⁾と、支部会設立のきっかけがやはり矢島楯子一行の訪問にあったことが記されている。まさに矢島と久布白が仁川を訪れたその時のことを思い出しながら、久布白は後に「仁川の支那料理」の美しさと人々の心尽くしの接待に感銘を受けたと記した⁷⁾。同じく、釜山支部も、「六月廿三日發會式を舉行す。集會者五十名。この中未信者十名程出席、今後徐々に堅實なる働きに取掛る覚悟であります。」⁸⁾と釜山支部としてはじめての報告が『婦人新報』に掲載された。翌8月号には「(略) 過日御盡力により會頭一行當地のため誠によい働きの端を御開き下され信徒求道中より入會志願者輩出し (略)」⁹⁾と、矢島らの訪問で釜山支部会が発足したことを喜んでいる様子がうかがえる。また、この釜山支部報告では発会式の様子が詳しく伝えられており、日本メソヂスト教会日曜学校局長の三戸吉太郎が講演を、來賓祝辞は釜山府尹の本田常吉、商業會議所会頭の香推源太郎、高等学校校長の安藤文郎、各教会代表として安武千代吉が

4) 吉武喜久代, 1921, 「平壤より」, 『婦人新報』, 第285号, p. 30。

5) 小崎千代, 1921, 「共同の目的の爲に」, 『婦人新報』, 第286号, p. 1。

6) 芝もと子, 1921, 「仁川支部」, 『婦人新報』, 第286号, p. 34。

7) 久布白落実, 1921, 「生活の内に現れし神の像」, 『婦人新報』, 第290号, p. 4。

8) 今井つよ子, 1921, 「釜山支部」, 『婦人新報』, 第286号, p. 34。

9) 矢田文一郎, 1921, 「釜山支部」, 『婦人新報』第287号, p. 33。

担当したことが記されている¹⁰⁾。さらに、同年9月号には釜山支部会の役員の名が報告されている。支部長は藤澤とら子、副支部長に田中静江が選出され、釜山支部の事務所は大應町メソヂスト教会に置かれていた¹¹⁾。翌10月号には、再び仁川支部の報告が掲載され、「六月六日新たに生れ出たる仁川支部にては事務所を同市山手町穴門前日本メソヂスト教会」¹²⁾に置くこと、また仁川支部の支部長として伊東藤子、副支部長に芝もと子が選出されたことが記されている。

『婦人新報』に記載された朝鮮における主な矯風会支部会の初代支部長など詳細をまとめると以下の通りである。

	事務所の場所	初代支部長	副支部長	記載（1921年）
平 壤	平壤日本基督教會内	中山ほの子	大岩幸子	第291号12月
仁 川	日本メソヂスト教会	伊東藤子	芝もと子	第289号10月
京 城	淑明女学校内	淵澤能恵		
釜 山	大應町メソヂスト教会内	藤澤とら子	田中静江	第288号9月

大邱支部会からの報告は、久布白が1925年に二度目に朝鮮を訪問する時になされている。その内容には、矢島の葬儀が行われた日にあわせて大邱でも矢島の追悼大講演会が行われたというものだった。そこには、「當夜の集を盛大ならしむる爲に新聞に於ても又町々の辻にも大々的に廣告致しましたので會堂には初めて見えた人々も多數あり、又男子もあり恵まれたる盛大な集まりでありましたし當地の新聞は其後書きました。」¹³⁾と矯風会の活動が新聞といったメディアの力によって拡大されることを望んでいる。この時の久布白の報告は、同年10月に発行された第332号に「再び満州朝鮮を訪ふ」と題して掲載されている。

1929年には、副会頭のガントレット恒子をはじめ朝鮮を訪問する。その報告文の中に「朝鮮部會長からのプログラム」¹⁴⁾とあるように、日本から代表者が朝鮮を巡回する際には朝鮮部會長の淵澤がプログラムを組んでいたことがわかる。釜山から入ったガントレットは、京城¹⁵⁾では当然のごとく淵澤のいる淑明女学校を訪問している。また、朝鮮では朝鮮総督府政務總監である兒玉秀雄の妻・澤子と交流があったことが次の通り記されており、矯風会の活動は、朝鮮総督府をはじめ時の政治家との関係が重要視されたことを指摘することができる¹⁶⁾。

10) 同上, p. 33。

11) 1921, 「釜山支部」, 『婦人新報』第288号, p. 35。

12) 1921, 「仁川支部」, 『婦人新報』第289号, p. 31。

13) 高島豊子, 1925, 「大邱支部」第330号, p. 35。

14) ガントレット恒子, 1929, 「朝鮮めぐして」第379号, p. 33。

15) 本論文では、史料との関連性を考慮して本文中においても当時の呼び名そのままを表記する。

16) 同上, p. 34。

三十一日は午後政務總監兎玉夫人澤子氏を會長とする愛國婦人會の講演が、愛國婦人會経営の幼稚園に開かれ、二百に近い婦人の聴衆に向つて社會事業と婦人に就て話さして頂いた。(略)特に恐縮に堪へなかつたことは兎玉總監夫人が態々私の旅宿まで御運び下さつて御挨拶下さつた上に、事業の爲め多大の寄附をして下さつたことであつた¹⁷⁾。

この1929年9月には守屋東と千本木道子が満州及び朝鮮を巡回し、やはり『婦人新報』にその報告を載せている。この中で守屋は、京城にいる淵澤について「淵澤先生の二十五年の朝鮮教育史は此女學生によつて表はれて居る。難しい慣習の朝鮮貴族の間に新進の教育を入れて古い國柄の美はしい處と、新らしい文化とを織りなして今日の功績を挙げらえた努力に對して、心から私は敬意を表する。」¹⁸⁾と淵澤の朝鮮における女子教育の成果を称えている。

1930年10月に発刊された第391号には連載『支部長の一曰』として大連支部長、奉天支部長、長春支部長、ハルピン支部長、安東県支部長に続いて、京城支部長の淵澤能恵と仁川支部長の芝もと子の記事が掲載されているところをみると、朝鮮における支部会の拡大が矯風会にとって喜ばしいことであると同時に、朝鮮にとってもそれは幸福なことであると信じている様子がうかがえる。

このように、1921年に設立された各支部会は、それぞれ支部会長を中心に運営されていたが、朝鮮部会長であり京城支部長である淵澤能恵が中心的役割を担っていた。淵澤は、会の活性化のため、日本から代表団が来るたびに淑明女学校はもちろん、その広い人脈を使って総督府関係者らと共同で会員や政治家だけではなく、淑明女学校の朝鮮人女學生などを動員して矯風会の活動に励んだ。しかし、各新支部が設立されたにも関わらず、朝鮮部会として集合し、最初の年會を開催するに至つたのは1933年10月になってからであつた¹⁹⁾。

3. 矯風会朝鮮部会及び支部会設立期の宣教方法論

1921年5月に発刊された『婦人新報』大会号には、矯風会の標語、目的、そして宣言文が最初のページに大きく掲げられている。標語は「神の爲め、國の爲め、家の爲め」²⁰⁾、そして宣言文の第一項目には「我等は宇宙の主宰なる神を信ず、其律法は自然界に書かれ、又我等人類の良心に記さる、此の律法に從ふ事は、自然界に於て美なるが如く、我等人類の世界に於ても眞理と恩寵

17) 同上, p. 34。

18) 守屋東, 1929, 「このごろ」, 『婦人新報』第381号, p. 30。

19) 朝鮮部会第一回年會について、次のように報告されている。「□昭和八年十月十一日午前九時 □京城壽松洞淵澤支部長宅に於て 副會頭ガントレット夫人満州御巡廻の御帰途、京城御立寄りを機とし、部會を開く。朝鮮部會は本日をはじめて第一回を開催。ガントレット夫人の御指導の下に部會組織をなす。」: 1933, 『婦人新報』第429号, pp. 39-40。

20) 1921, 『婦人新報』第284号, p. 1。

と眞の自由を與ふるものなり。』²¹⁾と、矯風会の信仰告白が記されている。つまり、矯風会の目的は「萬國の禁酒，萬國の純潔，萬國の平和」²²⁾にあるが、その根底にはキリスト教信仰が横たわっていることを強調しているのである。

では、「神の爲め」に働くとの標語を掲げた矯風会は、1921年に満州及び朝鮮に支部を設立するにあたって、自らのキリスト教信仰をどのように支部会員に伝えようとしたのかに関して考察する必要があるだろう。ここでの支部会員とは、満州及び朝鮮在住の日本人を意味している。つまり、宣教の対象は日本人であるが、当然この日本人が関わっている朝鮮人への影響を視野に入れて矯風会の活動は行われている。それは、朝鮮部会の事務所が置かれている京城の「朝鮮華族学校」と呼ばれた淑明女学校には朝鮮部会会長であり、京城支部会会長の淵澤能恵が女学校設立に関与し、淵澤が招待するキリスト教界の重鎮たちがこの女学校で講演を行うなど、矯風会が掲げたキリスト教信仰に基づく目的が朝鮮人にも影響を及ぼすことが念頭に置かれていることは明らかである。

このような新支部設立とキリスト教宣教に関する見解として久布白は「會の現在と、将来を慮る時に、各自が神に帰って、静肅に嚴肅に、自己の本来と、社會に對する使命を考ふる必要が有る」²³⁾こと、また矯風会が「有らゆる宗派、人種の差別なく神を信じキリストを信じて、社會を神のホームと爲す目的の爲めに、一致團結せる團體」²⁴⁾であると語り、当時支部数46を数える矯風会の新支部設立に関しては次のように述べている。

(略)今年度に到り、始めて第一回、矢島先生に従つて滿鮮四十日の旅に出かけました、其時先生の年来の信望と、當時の異状なる御努力とは、終ひに九ケの新支部を得、滿州、朝鮮に新らしく矯風會の基礎を確むる事が出来ました(略)

現今の矯風會は、北は北海道、南は九州、臺灣、滿州、朝鮮に到るまで、之れを大別して十一の部會として有ります、そして各部の責任者と、それから十ケの社會部、教育部、家庭部と云ふ部長方即廿一名の方々と、中央委員即ち、前會頭、會頭、副會副、通信書記、記録書記、會計、及青年部長、少年部長の八名が加はつて本部常置員として、一ケ年の方針を立て、且つ運用して参つた譯です²⁵⁾。

ここで、台湾、満州に続く朝鮮における新たな各支部設立が、日本の植民地下に置かれた朝鮮にとって有益であり、その土台には「今や萬國本部も日本矯風會を単に日本の一支部と爲さず、東洋に於ける指導の任に立つべき地位に在るもの」²⁶⁾との認識と、「神の子の自覚を以て」行われ

21) 同上, p. 1。

22) 同上, p. 1。

23) 久布白落実, 1922, 「デモクラシーの運用」, 『婦人新報』第294号, p. 2。

24) 同上, p. 2。

25) 同上, pp. 2-3。

26) 同上, p. 4。

ている活動であるという信仰とが融合していた。

月に一回発行される『婦人新報』には毎回「各地報告」あるいは「各地消息」欄があり各支部からの報告がなされているが、必要な場合は朝鮮部会内の支部から報告がなされる。1921年の矢島、久布白の満州及び朝鮮巡回旅行によって設立された朝鮮の新しい支部について、久布白は、第三十回基督教婦人矯風会大会報告として「満州朝鮮は今年いづれも新設の支部として、發濶たる元氣を保つて居られます。其會員の増加の工合、雑誌購讀者多數ある事、隆々たる勢を示して居ります。」²⁷⁾と、矯風会が拡大していくことを伝えている。また、東京部会幹事である守屋東は朝鮮に各支部が新設された翌年1922年に、満州と朝鮮を巡回した時の報告として次のような記事を寄せている。

懐かしい朝鮮

(略) 總督府の政治が行き亘つて居る、私にはこれまで行き届いた治政を見得るとは考へなかつた。歴代の總督に感謝を捧げる、過去の失敗が皆生み出した賜といふ感じを毎々見た。今更失敗はせむるより改むる方に力を入れるべきであると教へられた。特に現總督の徳望高き事を人々から聞く時私は心から感謝した。政は智のみではない徳でなければならぬ。私は困難な此朝鮮の當面に起つて働かれる總督及び夫人の爲に、また要路の人々の爲に神の御指導を心から祈る²⁸⁾。

ここで語られている「現總督」とは1919年から新たに朝鮮総督となった齋藤実を指している。矯風会は朝鮮総督府の役人をはじめ朝鮮在住の日本の政治家と親密な関係を持ち、矯風会の活動拡大とキリスト教宣教の業のためこの関係性を有効に働かせようとした。

翌1923年には、当時矯風会副会頭及び大阪支部会長であった林歌子が²⁹⁾、1924年には矯風会の法律部長であり神戸支部長も歴任した城のぶが朝鮮の各支部を訪問し³⁰⁾、朝鮮における矯風会會員の爲に講演会を開くなど朝鮮の支部活動を活発化させ、さらに會員を増加させるために努力を惜しまなかつた。

それと同時に、当時朝鮮総督であった齋藤実の妻・春子との関係を矯風会は重要視していた。先述した城のぶは、朝鮮の京城において「齋藤總督夫人淑明女学校に淵澤校長を訪問」³¹⁾したとの報告を後にしているが、総督夫人を訪問したと淑明女学校の淵澤校長訪問が並べて記されていることに注目したい。矯風会朝鮮部会長及び京城支部会長を務める淵澤の教え子がまさに朝鮮総督夫人である齋藤春子であった。矯風会は総督及び総督夫人との関係を通して、さらなる会の拡大とキリスト教宣教を目標に掲げていたといっても過言ではないだろう。城の報告には、続

27) 久布白落実, 1922, 「第卅回大會」, 『婦人新報』第295号, p. 4.

28) 守屋東, 1922, 「満鮮の一月路」, 『婦人新報』第297号, p. 80.

29) 林歌子, 1923, 「満鮮を廻りて」, 『婦人新報』第310号, p. 42.

30) 城のぶ, 1924, 「總選舉後第一回の巡回講演」, 『婦人新報』第319号, p. 30.

31) 同上, p. 30.

いて「満鐵社友會主催の婦人会」、「組合教會堂」、「淑明女學校」などで講演を行ったとの記録がある³²⁾。淑明女學校は淵澤が校長を務めるだけではなく、1906年の創立には淵澤が所属する日本組合基督教会（以下、組合教会）の代表的な人物や朝鮮統監府（1910年以降は総督府）の役人たちとの関わりが土台にあった³³⁾。矯風会の活動は、矯風会—淑明女學校—教会—総督府という相関図のもとで行われており、その宣教方法はこの関係性の上でこそ成り立っていたと言える。

4. おわりに

1920年代の矯風会は、日本での新支部設立はもちろん、満州や朝鮮における新支部設立を積極的に推進していった。それは、1919年に朝鮮各地で起こった独立運動を鎮静化させるために日本がそれまでの武断統治から文化統治へと舵を回したことと並行して、「キリスト教信仰」という名目のもと朝鮮人を武力ではなく思想や信仰の面から統治する方向性を示したと考えられる。1921年の朝鮮部会及び支部会設立は、まったく新しいものを作り上げていく過程ではなく、すでに1905年に朝鮮へ渡っていた矯風会会員である淵澤能恵とその人脈を通して決して難しい事ではなかった。特に、淵澤は組合教会の会員でもあり、朝鮮総督府の齋藤総督夫妻をはじめとした総督府関係者とのつながり、さらには朝鮮貴族とのつながりがあったため、矯風会は淵澤を通して教会関係者、総督府関係者、朝鮮貴族、淑明女學校関係者などその広い人脈を用いたキリスト教宣教を实践していった。また、組合教会関係者が総督府にも関わっているなど同じ人物が複数の団体にかかわり、その中でも重要な役割を果たす人物として互いの関係を維持していたため、淵澤を中心とする矯風会朝鮮部会は、何よりも教会、総督府、そして朝鮮貴族のつながりを通じた宣教方法が効果をあげると考えていた。朝鮮における矯風会拡大こそ、キリスト教宣教のため、また社会の「矯風」のためにも有効な手段であると信じていた。朝鮮が日本の帝国主義によって不当な植民地支配下にあるという事実を見極めるまでには至らず、日本の支配下であってこそ幸福を享受するという暗黙的なキリスト教界の見解から矯風会もまた脱することはできなかった。

32) 同上, pp. 30-31。

33) これに関しては拙論：神山美奈子、2017、「淵澤能恵の朝鮮女子教育—淑明女學校設立における日本組合基督教会と朝鮮総督府との関係—」、『アジア・キリスト教・多元性』、「アジア・キリスト・多元性」研究会、15, pp. 119-138. を参考されたい。